

カトリック福岡司教区 聖香油のミサ

2021年3月31日(水) 15時～ カテドラル大名町教会

司式・説教:ヨゼフ・アベイヤ司教

【聖書朗読箇所】

第1朗読 イザヤ書 61章 1-3a、6b、8b-9 節

第2朗読 黙示録 1章 5-8 節

福音朗読 ルカによる福音 4章 16-21 節

今日は聖香油のミサのために集まりました。人々の信仰の歩みを支える油が祝福・聖別されます。今日、祝福・聖別される油のしるしを受けることによって、洗礼、堅信、叙階の時に聖霊の賜物を与えられ、共同体が集う聖堂も祝福されます。また、病人のために癒しと心の平安が祈り求められます。今日聖別されて各小教区や共同体へ配られる聖香油によって、キリストにおける教区のすべての共同体の一致が表されます。そのような意味で、このミサに教区のすべての司祭の参加が強く求められます。

それと同時に、今日のミサの中で私たち司祭は、司祭職に召されたことを感謝し、キリストに倣ってよい牧者として生きる恵みを願いながら、その決意を新たにします。特に、今日は司祭叙階の60周年を祝うヨアキム 平田 敬 神父様と、50周年を祝う サトルニノ・オチョア 神父様と心を合わせて感謝をささげたいと思います。

今日の典礼の中で朗読されたみことばを味わいながら、司祭として求められていることを確認したいと思います。

最初に朗読されたのは、イザヤ書の61章の一部です。バビロン捕囚から解放されてエルサレムに戻った人々は、非常に厳しい状況に出会いました。神殿をはじめ大事な遺産が破壊され、社会の秩序も乱れていました。すべてを再建しなければならない状況でした。そこで、こういう再建は、どのようにすべきか、どんな基礎の上にすべてを立て直すべきかが、大事な課題になったのです。

バビロンで苦しんでいたときと同じように、神は民のうちに預言者を呼び起こし、行くべき道のりを示し、人々に希望をもたらすのです。預言者は、神様の望みを民に告げる使命が与えられます。そのために、預言者の上に「神の霊」が注が

れます。それは、神様の心に満ちている愛と慈しみの霊です。この霊に導かれて、預言者は、貧しい人、当時の状況の中で苦しんでいた人々、虐げられた人々に、目と心を向けます。この人々の解放こそ、新しい現実の基礎となります。いくら立派な神殿を建て直しても、神にかたどって創造された一人ひとりの人間が、神の子としての尊厳が守られないなら、民の本当の再建は不可能だと預言者は力強く述べます。これこそ神様のみ心であり、これこそ主が与えてくださる「恵みの年」です。

イエスは、久しぶりにナザレに戻ります。小さな町で、皆が知り合っているところ。安息日にイエスは、皆と同じように会堂へ行きます。そこでイエスは、今日の典礼で朗読されたイザヤの預言のことばを読まれます。このことばのうちに、自分の使命が示されているとイエスはナザレの人々に告げます。天の父の心に満ちている霊はイエスに注がれ、天の父の心に満ちている愛と慈しみを証し、のべ伝えるのは、自分の使命であるとイエスは表明されます。神の霊は、貧しい人々、捕らわれている人々、目の見えない人々、圧迫されている人々に目と心に向けさせます。彼らは、解放され、視力の回復と自由を与えられた時に、「恵みの年」が訪れたことが明らかになります。その後、ナザレを離れてイエスは、ことば、力ある業、人との関わり、生き方、つまりすべてをとおして、こういう天の父の愛と慈しみを示すのです。

よい牧者であるイエスのように兄弟姉妹に奉仕するために、また、人々に神の国の福音をのべ伝えるために呼ばれたわたしたち司祭は、現代にて、福岡教区において、何を求められているのでしょうか。わたし自身が感じているいくつかの点を分かち合ってみたいと思います。

- **まず、イエスのように天の父との交わりを深めることが求められます。** 祈るために十分に時間を取る司祭になることです。どれだけ忙しくても、その時間を取ることを優先させることです。みことばに耳と心に向けて、そのみことばに導かれて、祈りのうちに人類や地球の叫びを聞き取り、神様がわたしたちに求めておられることに心を開くことです。司祭は、イエスの愛にとどまる者で、イエスと共に生きるものです。
- **慈しみに満ちた心で人々に関わることが求められます。** 裁くことをせず、他の人々より悟っていると思わず、上から人々をみつめず、学びながら共に歩むことです。特に、排除されている人々との関わりを大事にし、苦しんでいる人々、疎外されている人々の友となることです。本当に、貧しい人々はわたしたちを「友」とみなしているのでしょうか。

- キリストへの愛に促されて、信徒への奉仕と福音宣教にすべてを捧げることが求められます。他のものはすべて二義的なものです。司祭は管理者ではなく、牧者であるはずで、教皇様がおっしゃるように、「羊のにおいがする羊飼ひ」になることです。聖パウロのように、福音の喜びを味わった者は、それを伝えずにはいられないはずで、
- 兄弟司祭との絆を大事にすることが求められます。過去に自分が傷付けられたことがあるかもしれません。また、自分自身が兄弟を傷付けたこともあるかも知れません。許し合うことによって、和解することによって、心の平安を改めて深く味わい、兄弟との交わりのうちに安らぐ場を与えられることを感謝するようになります。お互いの尊敬と愛から生まれる司祭団の一致は、教区にとって欠かせないものです。神様のゆるしを伝えるために派遣されているわたしたちは、このゆるしを求め、素直に受け入れる恵みを祈らなければなりません。お互いに心からゆるし合う、支え合うときこそ、司祭として与えられている使命を果たせるのです。
- 共に歩む中で、修道者、信徒と共にこれからの教区の優先課題を識別し、その実現に力を注ぐことが求められます。2019年の11月に教皇フランシスコの訪問を受けて「出向いて行く教会」になるために大きな励ましを受けました。具体的にわたしたちの教区の中で、そのためにどうすべきかを識別することは皆に課せられた責任です。福音は、現代人のための大事なメッセージを持っています。与えられた宝物を隠すことが出来るはずがありません。お互いに耳と心を傾けて、歩むべき道を識別することは、わたしたち司祭に求められていることです。

確かにわたしたちは、弱い者で罪人です。しかし、わたしたちはイエスを通して天の父の愛と慈しみに触れる恵みを与えられた者です。神に信頼を置いて、司祭としての道を歩ませていただいています。この愛に応える恵みを心から祈りたいし、今日、わたしたちと共にミサに参加している皆さんにも、そのために祈っていただくようお願いいたします。

これから叙階の時に約束されたことを改めて表明いたします。天の父は、わたしたちの弱さを支えてくださり、わたしたちの心を癒し、希望と喜びで満たしてくださいように。それによって教会共同体の中で兄弟姉妹に使え、社会において福音の光を燈す者になれますように。

福岡、2021年3月31日